

森を育てて水を守る

聖園女学院中学校

一年 永峰 由埜

今にも雨が降りそうだ。休日には両親とよく散歩をする。今日の目的地は家を出る前に決めていた。まっすぐ川を目指して歩き出す。

私が住む横浜市保土ヶ谷区には横浜市唯一の溪谷といわれる陣ヶ下溪谷公園がある。小さな溪谷だが街の中とは思えない自然豊かな場所だ。溪谷に行く前に住宅街の中を流れる帷子川沿いを歩く。川底と両岸をコンクリートで固めてある。目の前の川は水量も多く流れも速い。川底は見えず、天気の良いか灰色がかかっていておせじにもきれいとは言えない。私が「川」と言われて思い浮かべるのはこんな川だ。コンクリートで深く掘り下げてあるので下りていくことはできないが、「とてもさわれないな」と思いながら目的地を目指す。陣ヶ下溪谷公園の

入り口にたどり着くと急に周囲の気配が変わる。木々がうっそうとしげり、空気はひんやりと冷たい。しめった土をふみながら下へ下へと斜面を下りていく。近くを通る環状道路の車の音が段々と水音に消されて小さくなる。谷の一番下まで下りると川のせせらぎはどうどと鳴っていた。水は澄んでいて思わず手をのばしてすくった。水道水のキンとした冷たさとはちがうやわらかい感触だった。この水はどこから来るのだろうか。

水源について調べると陣ヶ下溪谷の上流では雨水のほかに、少しだが生活排水も流れこんでいることがわかった。なぜこんなにきれいな水が流れているのか。自分がふみしめたふかふかとした、しめった土はスポンジのような役割を果たしている。雨水を森の土が吸い、長い時間をかけて湧き出た水を流す。大雨が降っても一気に川に流れ出ることがないので洪水が起りにくく、反対に雨が降らずに乾燥しても土の中にためられるので水がなくなることもない。森林が「緑のダム」といわれるゆえにある。森林の役割はダム機能だけではない。森の土にしみこんだ水は、いくつもの地層を通り抜けてる過される。森の土は自然の浄水場の役割もはたしている。

先に歩いた帷子川付近はもともと水害の多い地域であったため、コンクリートで周りを固める工法を用いて川のはんらんを抑えてきた。しかしこのような川は水不足の時期になると汚れやすい。本来ならば、川底の岩や砂に水草が生え、微生物が付き、それをえきにする小動物や魚が生息する。川は水を運ぶだけでなく、流れの中で動植物を育て、浄化しながら水をきれいにする。人を守るための治水工事が結果的に水を汚染していることに気づき、ゆううつな気持ちになった。

しかし、人の手が入ることがすべて悪いとは言えない。この反省を生かして横浜市栄区の独川では水辺の自然復元工事を行い、自然の姿を取り戻しつつある。これもやはり人の手によらなければ実現しなかったことだ。

陣ヶ下溪谷も雨水や生活排水が川に流れこみ、溪谷を通ることによって水を浄化している。しかし森も手入れをしなければ育たない。この溪谷は以前は荒れた森だったそうだが、公園化され、月に二回、自然愛好会の方々が植物の調査や雑木林の手入れを行い、維持に努めている。これまで川や海を守るにはどうやって水を汚さないようにするか、ということに目を向けてきたが、きれい

な水を守るには森を育てていくことも大切だとわかった。実際のところ、森を育てて川の水がすぐにきれいなわけではない。大事なのは時間がかかっても私の子どもやそのまた子どもたちがきれいな水の恵みをうけられるようにすることだ。気をつけなければいけないのは、自然に手を加えるのではなく、自然が本来の姿に近くなるように「ほんの少し手伝う」ことだと思う。自然愛好会のボランティア活動は高校生から参加できるそうだし、それまでこの景色をずっと心にとめていようと思う。森を抜けると雨が降り出した。今日の雨はゆううつじゃない。